

学年通信

『なかま』

四日市市立三滝中学校
第2学年 第19号
2021.11.12.

人権学習を進めています

10月から、人権学習を本格的にスタートしています。以前もお知らせしましたが、2年生の人権学習における大きなテーマは、『反差別の生き方に学ぶ』です。今回は部落問題学習の一環として、古い映像ではありますが、映画『3月3日の風』を見て学習を進めています。ビデオの内容等について詳しくは、保護者の方ともお話してみましよう。

幼いころから差別を受けてきた西光万吉(清原一隆)さん。どこへ移り住んでも付きまとう差別から逃げるため、さまざまなことを考えますが、状況は変わらない。自ら命を落とそうとすることまで考えます。そんな西光さんを、周りのいろいろな人が支え、行動に移すきっかけを与えました。



当時からさまざまな人が、差別をなくそうと活動していました。平等会や親和会という名のもと、差別がまん延している現状をよく思っていない人たちもたくさんいました。しかしながら西光さんは、これらの団体の活動を、よく思いません。「差別されるのはかわいそうだから、やめよう」という、同情やいたわり。また「差別されている人たちの生活を安定させることで、差別をなくしていこう」という、あたかも差別されている人たちに原因があるかのような考え方だったからです。

このような同情融和の考え方では差別はなくなると考えた、西光万吉さん。全国水平社を設立していくようになりました。皆さんの感じたことを紹介します。



- ・ 同情融和の話は、ものすごく共感しました。確かに私が同じ立場に置かれていたら、「上から目線で」「かわいそうだから」「しょうがないから」と言われたらイヤな気持ちになるし、それこそ差別につながると思います。そんな中、自分たちの力で何とかしようという思いで、水平社を立ち上げた西光万吉さんや水平社に力を貸してみんなで団結した仲間の人たちは、本当にすごいと思いました。
- ・ 差別がひどかった時代よりは理解が増えて、(差別は)減ったけれど、こういう行動をしてくれる人がいなかったら、きっと今でも差別は減るどころか増えていくばかりだったと思うから、行動を起こすことって本当に大切なことなんだなと思いました。
- ・ 差別は「かわいそう」「何とかしてあげなきゃ」という、決して悪いと思っていないことも『差別』なのだとわかった。

- ・ この授業で、あきらめずに行動をしたり、声をあげたりすることによって、人生が変わったり、(差別を)無くしたりすることができるということを学ぶことができた。
- ・ 自分だったら、差別される人になっても、逃げてばかりで立ち向かえないと思う。それは西光万吉さんも一緒だったけれど、いろんな経験があって差別に立ち向かおうという気になっていった万吉さんは、すごいと思った。自分もいつ差別しているかわからないし、差別されるかもしれないと思うと、どちらも怖い。
- ・ 差別はダメだけど、今も障害者差別や部落差別、コロナにかかった人への差別が残っていたりする。自分でも何か無くすために何かできることはないのかと探してみます。差別はされなくても見ている人の気分が悪くなるし、されてる人はとっても苦しいと思います。

- ・ 差別をなくそうとしているのは、ほとんどが差別を受けている人だと思った。差別を受けていない人は、差別に気付かなくてなくそうとできないと思った。なので周りを見て、相手の気持ちを考えることが大切だと感じた。私だったらあきらめてしまいそうな気がした。自分から行動を起こすのは、すごく勇気があると思う。
- ・ 何かをきっかけで差別と闘おうと思えるのは、とってもすごいことだなと思いました。差別されている人からしたら、「力を貸す」「役に立つように…」という上から目線の言葉は、差別をされているように確かに感じるなと深く共感しました。今はもうない差別もあるけど、逆はまだある差別もあるから、なくしていく努力をしようと思いました。
- ・ 共感しました。同じ人であるのに、上からものをいわれるというのが、私にとっては耐えられないし、許せないからです。

こうした生き方をしてきた西光さんたちは、いよいよ『水平社宣言』を読み上げます。そこにどんな意味を込めていたのか。誰のために読まれたものなのか。そしてこの宣言は、今の私たちとどのようにつながっているのか。これを読んで、みんなはどう感じますか？